



# 学 校 通 信

平成28年度 第 7 号

平成28年11月 1日

練馬区立開進第三小学校

校 長 土 屋 信 行

## きり と つち 錐 と 槌

校長 土屋 信行

「鋭さも鈍さも共に捨て難し、<sup>きり</sup>錐と<sup>つち</sup>槌とに使い分けなば」

これは、江戸時代の儒学者 広瀬淡窓 の残した歌です。淡窓は、身分を問わず学問の機会を得られる塾の必要性を考え、私塾「咸宜園（かんぎえん）」を開きました。「咸宜」とは「すべてみなよろしい」の意味です。どんな身分の者でも受け入れるということを表しています。上記の歌は、訓戒のために塾生に残した「いろは歌」の中の一句です。

教わる側には、いろいろな人がいます。極端な例で言えば、少し教えるだけで多くを学び、自ら成長していく人。反対に、指導されたことがなかなか身に付かず、伸び悩んでしまう人。教わる側のタイプは、決して均一ではありません。

淡窓は、教育をしやすくするために、どちらか一方を切り捨てる、というようなやり方をよしとしませんでした。「鋭い反応をする者もいれば、鈍い反応の者もいる。でも、鋭い錐（きり）にも、鈍い槌（つち）にも、それぞれにきちんと道具としての役割があるように、人も必ず社会において何かの役目をもって生きている」と考えていました。「教え方」「やらせ方」次第で、教わる側、やらされる側は、大いに成長することができると思っていたのです。大人として、子供たちを指導するものとして、胸に刻んでおきたい教えだと私は思います。

自分の話で恐縮ですが、私は子供の頃、自分と異なる意見を受け入れることができず、自分の考えを人に押し付けてしまう傾向が強くありました。母からは「自分の物差しで人を測ってはいけない」と、いつも言われていました。そんな私でしたが、学生時代に出会ったある先生に、短所だと思っていた自分のこの強引さを意志の強さとして褒めていただいたことがありました。このことがあってから、私の人との接し方は変わっていきました。自分でも不思議でしたが、先生に認めていただいた嬉しさから、心にゆとりが生まれ、少しずつ人の話に耳を傾けることができるようになったのです。人として一つ成長できたように思いました。

この自分自身の経験と広瀬淡窓の言葉を、重ね合わせて考えてみると納得できることがいくつもあります。今後も、大人として、教師として、子供たちとの接し方について、しっかり考えていきたいと思っています。

